

補足スライド

『3. 社会と労働』の  
「1. 労働による社会形成」への補足

## [3-A] 社会と共同体

現代と前近代

## 課題

- ✓ すでに講義の中で  
人間社会と動物集団との違いについては、  
明らかになっている。
- ✓ ここでは  
人間社会と人間共同体との違いについて、  
明らかにする。

## 目次

- ▶ 総論
- 1. 原理の違い
- 2. 主体の違い
- 3. 規模の違い

## 総論

集団・社会・共同体

## 社会と共同体

1. 動物の集団
2. 人間の共同体
  - [独] Gemeinschaft (ゲマインシャフト)
  - [英] Community (コミュニティ)
3. 人間の社会
  - [独] Gesellschaft (ゲゼルシャフト)
  - [英] Society (ソサイアティ)

## 共同体の過渡的な位置付け(1)

- 理論的には、人間集団の  
支配的形態としての人間共同体は、――
  - 動物集団と人間社会とを橋渡する  
曖昧で過渡的な形態である。
 = すなわち
  - もはや動物集団ではないが、  
まだ本来の人間社会にはなっていない  
ような人間集団のあり方である。

### 共同体の過渡的な位置付け(2)

- したがって、共同体は前近代を特徴付けるものである。



未来 現代 前近代

### 現代社会の過渡的な位置付け

- 現代社会（＝資本主義的な市場社会）は、もはや前近代的共同体ではないが、まだ本来の人間社会として完成しているわけではない。
  - ∴ 市場社会の形成は、総体としては、モノ（＝物件）を通じた無自覚的な社会形成であって、ヒト（＝人格）による自覚的な社会形成ではないから。
  - ∴ 社会形成の根拠である労働そのものはブラックボックスとして市場の外にあるから。

### 現代社会の中の共同体

- そこで、現代社会のサブシステムとして存在しているような、かつ必ずしも市場を通じての経済的利益の一致だけによって成立したのではないような、人間集団も、しばしばコミュニティ（＝共同体）と呼ばれている。

	社会	共同体
1. 原理	自覚的	本能的
2. 主体	自由・平等な個人	共同体
3. 規模	グローバル	ローカル

### 1. 原理

自覚的か本能的か

### 社会形成の原理

- 社会的労働を構成するべき各自の個人的労働はそれぞれ自覚的・媒介的
  1. 構想の実現
  2. 意志への従属
- ↓ ゆえに
- 社会的労働もまた自覚的・媒介的
  1. 互いの頭の中で同じ未来を構想し、それに向けて手順・方法を共有する。
  2. 互いの意志をすりあわせて（合意して）共通意志を形成し、それに従う。

### 本能的集団

1. 動物集団
    - 本能のおもむくまま集団形成
    - 猿・蟻・魚
  2. 家族（C共同体）
    - 生まれたときから親子関係
    - 子は親を選べない
  3. 前近代的な共同体
    - 生まれたときから共同体の一員
    - 子は生まれる場所を選べない
- 家族・共同体は運命的・宿命的・本能的

### 2. 主体

個人か共同体か

### 社会形成の主体

- すでに労働過程で個人は自然から自立している。
- この自立した個人が物質代謝の効率的運営を実現するために、わざわざ意図的に、主体的に社会形成を行う。
- 社会形成という行為の結果が社会というシステムである。

### 個人は、いまや

1. 自然から自立しただけではなく、  
→ すでに、物質代謝の効率的運営で見た通り
2. 社会からも自立している。  
→ ここ、物質代謝の社会的運営で見ている通り

### どっちが主体か

社会	共同体
自由・平等な個人が主体	共同体が主体
社会は個人が自由意志で形成したもの	共同体が個人を支配、共同体は個人を犠牲にしても存続するべきもの
個人は社会から自立	個人は共同体に埋没

### 自由の原理

- そもそも個人的労働において自由の原理が成立している。
- 誰に命令されたのでもなく自分の自由意志で社会を形成している。
- 利益の一致で社会を形成するのだから、必要なのは自由な意志の共通性（=合意）だけである。
  - 自由意志に基づかないような強制力は不要である。

### 平等の原理

- そもそも相互的に、同等・対等に自由である。
- 過程において、  
未来として設定された共通の目的に対して、  
現在の互いの個人的労働を  
 相互的に、同等・対等に手段化している。
  - どちらも下の地位にはない。
- 結果において、  
 相互的に、同等・対等な利益を  
 達成している。
  - どちらも一方的に損得をしていない。

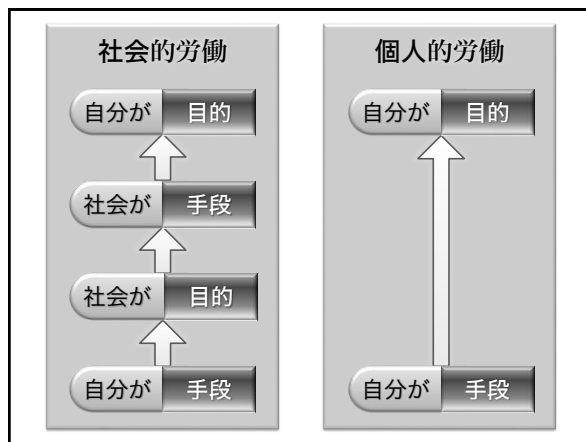
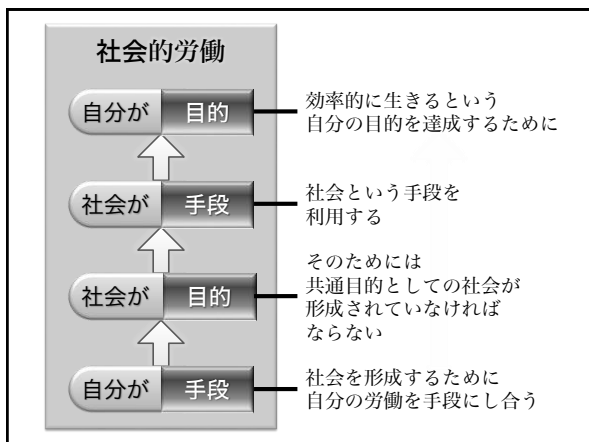
### 補足：目的と手段

一方では、

- 自分が目的
  - 自分の利益の実現が目的であって、
- 社会が手段
  - 社会はこの自分の目的の達成のための単なる手段である。

他方では

- 社会が目的
  - 自分の目的を共通の目的、社会的目的にして、
- 自分が手段
  - 自分の労働はこの社会的目的の達成のための単なる手段にする。



### 3. 規模

グローバルかローカルか

### 社会の規模

- 経済的な社会形成は、利益の一致（物質代謝の効率的運営）に基づく。
- 利益の一致さえあれば、  
 地縁・血縁によって制限されずに、
  - どんな人とも経済的な社会関係を形成しうる。
  - ▲ かつ
  - いくらでもこの社会関係を拡大しうる。

## 家族・共同体・国民国家

1. 家族・部族（C共同体）
  - 血縁によって制限
2. 前近代的な共同体
  - 地縁によって制限
3. 近代的な国民国家
  - 国境によって制限